論　説

グローバリゼーションの文化的視座

中　野　弘　美

はじめに

私たちが生きるこの不明瞭な世界では，経済・社会・政治・文化の間の明確に秩序づけられた諸関係が，分離・分裂を繰り返す混沌とした錯綜へと道を譲ろうとしている．この地球規模の新たな無秩序のなかで，ますます重要性を帯びているのが文化の役割である．グローバリゼーションは文化の領域でもっとも顕著な展開をみせる．記号はモノやサービスよりも容易く時空を超える．経済的・政治的な事柄は，文化フィールドを通過することで，すなわちシンボリックな意味の交換をとおしてグローバルなものへと変容する．文化的な視点からグローバリゼーションがどのように見えてくるのか，それを確認するのが本稿の目論見である．

近代性のダイナミズム

近代（modernity）とはポスト中世の謂であり，伝統的な制度特性を有する時代以後のイノベーションとダイナミズムを特徴とする社会編成を指す．ギデンズによれば，近代の諸制度は，資本主義・工業化・監視・国民国家・軍事力から成る（Giddens, 1990）．グローバリゼーションは，世界規模の資本主義経済，地球規模の情報システム，国民国家体制，そして軍事力のパワーバランスといったモダニティの観点から把握することができる．なぜなら，近代の諸制度は，特定の地域の特殊な歴史的経緯にもとづく社会関係に拘束されることなく，その他の地域に埋め込むことができるとされるからである．

時間と空間の分離を許容するがゆえに，近代の諸制度はグローバル化の契機を内在的に有する．時計による抽象的な時間の発達は特に重要である．これによって時と場所は互いに引き離され，同じ時，同じ場所に存在しない人間どうしの関係が展開可能になる．また，情報伝達技術の発展にともない，あらゆる取引が時空をこえて可能になり，ある地域が，そこから遥か離れた場所でおこる事柄に深く影響されるようになる．地球規模で24時間休みなしに為されるオンライン取引が示すように，社会関係は時空をこえて拡張しつづけている．

ギデンズは近代の諸制度を，立ちはだかるものを悉くなぎ倒す制御不能の巨大権力になぞらえる．近代はその起源を西欧にもち，やがて地球上を席捲する．一方，そのような性格づけに染め抜かれた近代とグローバリゼーションの関係は，西欧中心主義にもとづくものであり，近代の一つの型のみを拡大解釈しているにすぎないとする批判もある．フェザーストンは，近代を時間軸に沿って，時代別の社会編成の変容プロセスのみを観るのではなく，空間軸に沿って関係論的にも考察すべきであると論じる（Featherstone, 1995）．彼によれば，近代化は地球上の異なるゾーンで多様な姿をみせる．したがって，モダニティはモダニティズと複数形で語る必要があるのだ．たとえば日本は，中世

—近代—ポストモダンという線的な発展形態にうまく当てはまらない．日本の成し遂げたことは，皮肉にも，近代のプロジェクトにとって文化的・地理的中枢とされる西欧の位置づけに疑問を投げかけることになる．日本はテクノロジーの分野で優勢を占め，ハリウッドの文化産業に足場を確保し，ポスト・フォーディズムの生産技法に先鞭をつけ，世界における多額の債権国でもある．日本はモダン（そしてポストモダン）における独特の変奏をかなでている．

グローバルな文化の流れ

グローバリゼーションは性格上，経済的な事柄をその特徴にしている．世界規模の経済単位の約半数は，200社の多国籍企業が構成しており，それらは全生産量の3分の1以上を占めるといわれる（Giddens, 1989）．とりわけ自動車部品・薬品・建設・半導体は地球規模の企業の牙城となっている（Waters, 1995）．たとえば半導体の場合，生産の9割は10社の多国籍企業が占め，その地政学的な中心はアメリカから日本，そして中国へと移動している．また，インフォメーション・テクノロジーの飛躍的進展にともない，世界規模の金融取引が1日24時間休むことなく行なわれ，あらゆる経済実践のなかで最もグローバル化の進んだ分野となっている．ヨーロッパにおける為替相場介入制度の崩壊，ニューヨークのブラック・マンデー，そして東南アジア経済のメルトダウンなどの例が示すように，すべての国家がグローバルな金融市場の動向に翻弄される．グローバリゼーションのある部分は地球規模の経済活動から成っており，相互に連結されながら，同時に不均衡な世界経済を創りあげている．

ところで，経済活動がグローバルな展開をみせたのは何も昨今のことではない．少なくとも16世紀以来，ヨーロッパ商人による貿易実践はアジア，南米，そしてアフリカへと拡張していった．しかし，現代のグローバリゼーションに関する注目すべき点は，その展望の広さとペースの速さにある．1970年代以降，時間と空間におけるコストの短縮を契機に，グローバリゼーションは加速する．フォーディズムの危機に直面した多国籍企業の多くが，新たな利潤を創出する資源の獲得に駆り立てられていく．世界的な不況によって経済活動のグローバル化が新たに進み，生産と消費のサイクルをスピードアップさせる戦略が，情報伝達技術の革新を活用しながら展開されることになる（Harvey, 1989）．こうして，加速するグローバリゼーションは，「脱組織型」（disorganized）時代の資本主義的経済実践として位置づけられていく．

しかしながら，グローバリゼーションは経済的な側面以上に，文化的なインパクトにおいて顕著な姿をみせる．固定した場に密着した文化的意味や価値観を残しながら，私たちは身近な地域を遥かに越えて広がるネットワークへとますます組み込まれていく．均質な世界文化などというものはもちろんないけれど，文化的な融合や分裂のプロセスは，国家間の関係とは独立して，地球規模で繰り広げられている．

ピータースによると，文化について2つの見方が識別できる．特定の場に密着した内向的なものとして文化を捉える見方と，特定の場を越えた外向的な学習プロセスとして文化を捉える見方である．

> 歴史上長い間優勢を占めてきた「内向きの文化」（introverted cultures）はしだいに後退し，かわりに，多様な要素から成る「越境する文化」（translocal culture）が前景化してきた（Pieterse, 1995: 62）．

たとえば，私たちの日常生活の一側面はコスモポリタニズムにほかならない．テレビやラジオ，スーパーマーケットやショッピングセンターをとおして，遠く離れた多様な文化が，商品=記号の姿をまといながら私たちに接触してくる．植民地主義とそれ以後の時代に現れた人間の移住のさまざまな形は，加速化するグローバ

リゼーションとも連動して，異なる文化が併存し，接触し，融合する状況を産みだしている．このことは，内向きの文化モデルからの脱却を要請しているのかもしれない．

クリフォードは，文化を語るとき，ロケーションよりもトラベルのメタファーを使うべきであると論じる（Clifford, 1992）．その隠喩には，旅をする人々，越境する文化，縦横に移動するトラベラーの滞在地などが含意される．たとえば英国では，ケルト系・サクソン系・ヴァイキング・ノルマン系・ラテン系・アフロカリビアン・アジア系などの人々が居住している．アメリカにも，ネイティブアメリカン・アングロサクソン・フランス・スペイン・アフリカ・メキシコ・アイルランド・ポーランドなど多様な系譜がある．ここ数十年の間に起こったグローバリゼーションの加速化によって，あらゆる地域が遠く離れた場所からなんらかの作用を受けていることを考慮に入れると，文化に関するトラベルのメタファーの重要性はますます高くなるだろう．

分裂・錯綜する流れ

トラベルや移動への強調に対抗するかたちで再浮上してくるのが，「場の政治学」（the politics of place）である．特定の地域への執拗な意味付与実践は，東ヨーロッパのナショナリズム，ネオ・ファシズム，そしてイスラム原理主義などのなかに見てとることができる．グローバリゼーションは結果的に，経済的衝動に駆り立てられた西欧近代の均質的な拡張とは程遠い姿をとることになった．アパデュライによれば，現代のグローバルな情況は，民族，テクノロジー，国際金融，メディア，そしてイデオロギーなどが分離・分裂しながら（disjunctive）ダイナミックな流れを呈しており，調和的なマスタープランによってきっちり型にはめられるものではない．むしろ，そうした流れの速さや衝撃によって破砕し，断裂し，損壊しつつある（Appadurai, 1993）．不確実性・偶然性・無秩序といった表現が，秩序・安定性・体系性といったものに取って代わりつつある．グローバルな文化の流れは，すっきりまとまった線的な決定の連鎖をとおして把握されるのではなく，複雑で重層的な複合要因によって決定されるものとして理解されなければならない．そうした重層決定が導く地平は，秩序だったグローバル・ヴィレッジではなく，闘争と反目と矛盾が錯綜する多層的な磁場であろう（Ang, 1996）．このようなマッピングは，文化の多様性と断片性を強調する点で，グローバリゼーションが文化的同質化（cultural homogenization）のプロセスであるとする考え方に対抗するものとなる．

文化的同質化説が提起するものの一つは，資本主義における消費実践のグローバル化が文化の多様性を損壊するという主張である．グローバリゼーションによって，世界中で似たような文化が発展・成長し，固有の文化の自律性が失われていく．それは文化植民地主義（cultural imperialism）にほかならず，ある文化が別の文化を支配することを意味する．地球上の異なる地域で同質の文化が増殖する要因は，一般に，多国籍企業の活動であるとされるが，文化植民地主義は，グローバルな資本主義が内包する一連の経済・文化プロセスの結果である．こうした文脈をふまえてロビンズは，グローバルな資本主義が自らを超歴史的で超国家的な近代化の推進力と見做しながら，実際には，欧米の商品・価値観・生活様式を輸出する西欧化にほかならないと批判する（Robins, 1991）．

文化的同質化を唱えるハーバート・シラーは，電話・電信等のグローバルな通信会社の多くはアメリカ企業が占めており，連邦政府・軍需産業・テレビ局が強固に結び合わされたネットワークを形成していると指摘する（Schiller, 1969）．マスメディアは資本主義と多国籍企業をイデオロギー的に支援しながら，世界的な資本主義システムに自らを適合させていく．メディアは企業のマーケティングのための媒体を自ら演じながら，アメリカ型資本主義を他の諸国や地域が

「自然な」かたちで進んで受け入れるためのイデオロギー装置として稼動する．

しかしながら，文化植民地主義としてグローバリゼーションを捉える議論には，以下の3つの問題点が指摘されている（Barker, 2000）．

1）文化的な言説のグローバルな流れが一方通行として構成されるとする主張は，現在，説得力をもちにくい．
2）文化的な言説の有力な流れが西洋から東洋へ，地球の北から南へ向かっているにしても，必ずしもそれが支配の一形態であるということはできない．
3）グローバリゼーションは単純な同質化のプロセスをたどっているわけではない．断片化や雑種化に向かう諸力は同質化と同じように根強い．

経済的・軍事的・文化的なグローバリゼーションは，たしかに，西欧近代の世界的拡張の主要部分を構成する．これらの諸制度がヨーロッパに起源をもつかぎりにおいて，近代は西欧のプロジェクトであるといわねばならない．グローバリゼーションの初期段階が，西洋による西洋以外の他者への問いかけ／取調べ(interrogation)であったことはまちがいない（Giddens, 1990）．商業的交易の拡張が直接的な植民地支配に替わっていくなかで，ヨーロッパ列強はその経済力と軍事力とともに，文化的・宗教的な言説の力を他者に押付ける．植民地支配を受ける国家・地域は，資源の供給源であると同時に，列強の保護する市場へと変容する．20世紀後半までには，反植民地闘争や独立運動が一連の成功を収めるが，いわゆる途上国の経済は従属的な役割を担うべく，世界の経済秩序のうちに不平等なかたちで統合されることになる．

雑種としての文化

こうしてヨーロッパの植民地主義は，地球上に文化的な痕跡を残してきたわけだが，南アフリカのアパルトヘイトほどその爪あとが深く鮮明なものは少ない．そこでは白い神と白人の剣が結託して支配を正当化した．南アフリカにおいてヨーロッパ文化は，言語・スポーツ・建築・音楽・料理・絵画・映画・テレビなど，ハイ・カルチャーの表象として自明のものとなった．多様な言語構成から成るこの国の中で，翻訳の結節点として英語が特権的な地位を有するのは偶然ではない．にもかかわらず，南アフリカにおける「外的な」文化の衝撃は，単純な文化植民地主義の議論に収まりきれないところがある．たとえば，外国発のヒップホップやラップミュージックが，この国の黒人の間で相当の人気を博している状況を考えてみよう．南アフリカのラッパーたちは，非アフリカ的な音楽形式を表面上取り入れながら，アフリカ的なひねりを加味してハイブリッドな形態を創造する．それを欧米の音楽シーンは逆輸入している．「アメリカ的」なラップはカリブ海諸国からアメリカへ渡ったとされているが，そのルーツは西アフリカの音楽や奴隷たちの唄に辿ることができる．音楽において内部と外部を隔てる明確な境界設定は無効とならざるをえない．なぜなら，ラップがアメリカ的だとする自明な理由などないし，アメリカ的なその形式は，母体を実はアフリカに負っていることになるからだ．だとするならば，いったいいかなる意味でソウェトにおけるラップ人気を，文化植民地主義と呼ぶことができるだろうか．

文化植民地主義の議論は，その核心において，強制と威圧に依存している．しかしアフリカの人々が欧米の音楽を聴き，欧米のテレビを視て，欧米生れの消費財を買って満足している場合，それを一方的な支配の枠組みで裁断するのは，「虚偽意識」の議論を援用しないかぎりかなり無理があるのではないだろうか．地下を無方向的・多方向的・重層的に横断する根茎のようにリゾーム的（rhizomorphic）で分離・分裂性をもつグローバルな文化の流れは，一方通行的な支配／従属の議論より，文化的な異種混交性の

枠組みで語るべきである（Deleuze and Guattari, 1988）.

グローバリゼーションが西洋から「他者」への一方通行的な流れでないことは，非=西欧的な思考と実践が欧米に与えた次のような衝撃のなかに見てとることができる（Barker, 2000: 117）.

1）「ワールドミュージック」の世界的流行
2）中南米から欧米へのテレビ用ソープオペラの輸出
3）地球の南から北へ移住した人々による民族的ディアスポラの形成
4）欧米社会内におけるイスラム教，ヒンドゥ教などの隆盛
5）「エスニック」料理・生活用品の流行

これらのインパクトは結果的に，西欧的な「進歩」の視座を脱中心化するだけでなく，国民文化は同質的だとする議論を脱構築することになる.

加速するグローバリゼーションの現段階は，断片化する不均衡な展開のプロセスにあり，世界的な相互依存の様態を呈している．近代が捏造した「他者」は西欧の呼びかけにただ頷く／肯くだけでなく，今では，自ら問いを発信している．既存の「中心／周縁」モデルが複雑で重層的な新たな事態に直面して機能不全に陥っていると，アパデュライは語っている.

> イリアン・ジャヤの人にとってインドネシア化はアメリカ化よりも心配である．それは韓国人にとっての日本化，スリランカ人にとってのインド化，カンボジア人にとってのベトナム化，そしてアルメニアやバルト三国の人にとってのロシア化と同様の事態である（Appadurai, 1993: 328）.

グローバル／ローカル

近代資本主義には文化的同質化の契機が確かに含まれている．しかし同時に，断片化や雑種化という異種混交のメカニズムもまた作動しているのだ．重要なのは同質化か異質化かという問いではなく，二つの傾向のどちらも現代世界のライフスタイルの特徴になっている，そのありようを問うことである．先に述べたように，内向きの文化，弾力性のあるエスニシティ，そして根深いナショナリスティックな情念などが，越境する学習プロセスとしての文化と共存している．グローバルなものとローカルなものが互いを構成しあっている．ロバートソンの主張するように，ローカルとみなされるものの多くが，トランスローカルなプロセスから産みだされ，国民国家もグローバルなシステムの内部で鍛え直され，国家主義的な感情の噴出もまた，グローバリゼーションの一つの局面とみなすことができる（Robertson, 1992）.

消費社会のグローバルな拡大が，商品=記号にたいする無際限の欲望を刺激するなかで，ニッチ・マーケットやカスタマイゼーションが引き起こした，消費者の多層的／分裂的なアイデンティティ構築は，雑種化に拍車をかけている．ローカルだとされるものが，実はグローバルなマーケティング戦略の産物であり，地域的な差異を一つのシステム内部の示差的な項に還元するメカニズムが，明らかに作動しているのだ．特殊性や多様性を強調する議論が，グローバリゼーションについての言説の内部に位置づけられる理由はここにある．グローカリゼーション（glocalization）のなかで「ローカルなもののアイデンティティは，総合的なグローバリゼーションのプロセスの内部で構築される」（Robertson, 1992: 175）のである．その典型的な例をクレオール化（creolization）のなかに見ることができる.

言語のクレオール化や文学のハイブリッド化はポストコロニアル文学に共通のテーマとなっ

ている．それは表現者とポストモダニズムの出会いを印すものでもあるわけだが，植民地化をもくろむ言語と植民地化を被る言語は「純粋な」かたちで現れるのではなく，異種混交の様相を帯びる．この事実は，植民地化をもくろむ文化の中心性と，植民地化を被る文化の周縁性をめぐる中心／周縁の二項対立そのものを動揺させる．

カリブ海周辺地域の言語運用において，「クレオール的変成」（Creole continuum）という概念はますます重要性を帯びている．それは例えば，英語とフランス語の間で語法を重層的に使用したり，一方の文法を使っているうちに他方の文法に切り替わるといったことをとおして，独自の言語体系を構築していくプロセスである．クレオール化は文法の抽象性や「正統な」語法などよりも，文化的実践としての言語を強調するのだ（Barker, 2000）．

クレオール化が示唆するものは何か．それは，文化的同質化の主張が文化植民地主義の議論の土台になりえないということである．文化植民地主義を構成するものの多くは，西欧近代の資本主義という名の表層として理解すべきである．その層は先行文化の上に被さるものの，既存の文化は必ずしも壊滅するわけではない．時間・空間・合理性・消費・家族・ジェンダー・セクシュアリティをめぐる近代とポストモダンの言説は，より古い伝統的な言説と併置され，イデオロギー闘争の場が用意されることになる．その結果現れるのが，アイデンティティのハイブリッドな形態と，伝統的／原理主義的／国家主義的アイデンティティである．植民地化を被る文化から植民地化をもくろむ文化への逆の流れやハイブリッド化の流れは，同質化を推し進める文化の流れと同じくらい強く，激しい．

グローバリゼーションのもつハイブリッドな性格は，文化植民地主義の概念を脱構築するものの，それによって権力と不平等の問題が棚上げされるわけではない．生活者が商品=記号の使用を横領し，自らのハイブリッドなアイデンティティを構築するにしても，「権力性とヘゲモニーは異種混交性の内部にも埋め込まれ，再生産される」（Pieterse, 1995: 57）．たとえば，ディアスポラの黒人が産みだすハイブリッドな文化は，奴隷制時代に埋め込まれた権力構造や移民の経済要因を隠蔽しない．ホールによれば，ディアスポラのアイデンティティは文化的な権力関係の内部で／によって構築され，この権力関係が自己同一性を構成するようになる（Hall, 1992）．要するに，ニューヨークに住む裕福な白人男性の文化的なアイデンティティは，インドの一地方に住む貧しいアジア系女性のものとたいへん異なるわけで，私たちが地球社会の一員であり，そこから抜け出せないにもかかわらず，参加の形態は不平等のままであって，グローバリゼーションは依然として不均衡なプロセスを踏んでいるのだ．

しかし，この不均衡なプロセスは，植民地主義のもつ一方通行的な流れと同じものではない．グローバリゼーションは植民地主義に比べてはるかに一貫性に乏しいし，直接的な文化統制をしくわけでもない．植民地主義は特定の目的をもったプロジェクトであり，一つの社会システムを一つの権力中枢のもとに地球上遍く伝播せんとするもくろみである．一方グローバリゼーションは，地球上のあらゆるエリアの相互連結・相互依存を前提としており，グローバルな統合を目指す特定のプロジェクトというよりも，経済的・文化的実践の結果として立ち現れる．「グローバリゼーションには，往年の植民地主義列強や現代の経済大国の別なく，すべての国民国家の文化的結束性（cultural coherence）を弱体化するという効果がある」（Tomlinson, 1991: 175）．

ニュー・ソーシャル・ムーヴメンツ

グローバリゼーションの超国家的性格は，個々の国家の機能に重大な変更をもたらし，国民国家の政治形態にさえある種の影響を与える．その文化的に特異な例が「新しい社会運動」

（New Social Movements: NSMs）である．NSMsは1960年代の欧米社会に出現し，学生運動，ベトナム反戦運動，市民権闘争，そして女性解放運動などと結びついていた．さらに現在では，フェミニズム，環境保護運動，平和運動，文化的アイデンティティのポリティクス，そして長野における田中県政の成立などを包含している．これらに共通する特徴は，労働運動を軸にした旧来の階級闘争と一線を画していることである（Melucci, 1981）．

現代のラディカル・ポリティクスは階級還元主義から分離しつつ，NSMsをとおして組織されることが多い．そしてますます職場の外を基盤にした社会的・政治的集合性を獲得しつつある．NSMsは一般的な生活者の連帯と持続的な活動をとおして，集合的なアイデンティティを形成する．そのアイデンティティの集合的編成はデリケートなプロセスを踏んでおり，継続的な参加と投資が必要条件となっている．

NSMsの中核をなす集合的なアイデンティティの形態は，既存の階級への自己同一化とは少々異なっている．実際，この運動は，階級的利害と政治的要求の一枚岩的関係が崩れ去ろうとする時代に登場した．1960年代後半以降，階級や職業と政党との同盟関係が着実に衰退しつつあることが，投票行動と政治活動の諸研究から明らかになっている（Crook et al., 1992）．主要な政党への信頼が薄れるとともに，より直接的な行動への関心が昂まっていき，労働組合の妥協と折衝の強調路線が許容するよりも広い視野をもった戦略や戦術が出現することになる．もちろん，NSMsを，階級を基盤にしたポリティクスに全面的に取って代わるものと見做すことは誤りだろうが，それを部分的であれ，社会編成の変化に反応したものと見ることは可能である．工業化を軸にした産業社会から消費社会への変容が，NSMsの背景にあることは確かである．経営者側と労働者側の対立は，社会・経済・文化の発展の方向をめぐるより広い闘争へとシフトしつつある．なかでも，対立の軸がアイデンティティ・自己実現・脱物質主義などをめぐる課題へ移行してきたことは留意しなければならない．

近代の「解放のポリティクス」が関わってきたのは，人生の選択を妨げる諸拘束からの解放であった．このポリティクスは，搾取的な階級関係と，固定化した社会的抑圧からの解放と自由を重視し，公正・平等・参加の理念を立ちあげた．ところが，物質的欠乏からの解放がある程度達成されると，自己実現やライフスタイルに関心をむける「ライフ・ポリティクス」が登場する．このポリティクスは，グローバルなコンテクストのなかで自己実現を促進するような暮らしのかたちの創造を目指す．その生活形態の中核をなす倫理は「私たちはどのように暮らすべきか？」といったモラリスティックな姿勢である（Giddens, 1992: 214）．

私たちが自分らしく在りたいと望めば望むほど，ますますグローバルな環境という，脱出不可能なコンテクストを視野に入れざるをえなくなる．たとえば，化石燃料の枯渇の問題や，科学技術の限界を認識することで，経済効率優先の見直しや，新たなライフスタイル選択の必要性が見えてくる．生物科学の進歩は，遺伝子操作やクローン誕生をめぐって，生命とは何かという問いを私たちに突きつける．こうした自己監視／省察（reflexivity）が，社会生活の再-道徳化を含みながら，NSMsの背景をなしている．それらが関心をよせるのは，直接民主主義と個々の運動への積極的参加であり，反権威主義的で反官僚主義的で反産業社会的なスタンスを共通の特徴としている．その組織形態は緩やかに流動しつつ，民主的側面を重視しながら直接行動主義を標榜する．また，運動自体が価値志向的であり，目標が限定的であり，メンバーシップが可変的であるという点で，個々の運動間の境界は曖昧なものとなっている．

NSMsの直接行動の矛先は，政治家に代表される代議制の象徴にではなく，オイルメジャー・大学／研究所・軍隊・ダム工事・原発・森

林破壊・捕鯨などに向けられてきた．それらは制度化した権力関係への挑戦を，文化的なコードを書き換えるという戦術を使いながら，意味付与実践として行なっている．たとえば，調査捕鯨等の拡大を実証的データにもとづいて訴える日本政府にたいし，グリーンピースは鯨をシンボリックなトーテムに置き換え，声高に逆襲する．NSMsはマスメディアを巧みに横領しながら，自らの「シンボリック・ポリティクス」を流通させていく（Barker, 2000: 128）．メディア側はそれらの直接行動を格好のネタとして報道／ドラマ化する．そうした補完関係のなかで，NSMsの生産するイメージの総体が運動の中核を構成し，運動の多くは大衆的なアピールをもくろむメディア・イヴェントを模倣することになる．NSMsが実に多様な社会階層の人たちを動員できるのは，そのシンボリックな言語操作が，記号のもつ多意味性（polysemic）を最大限に利用しているからである．この意味で，近代の生みだした政党政治以上に，NSMsはカルチュラル・ポリティクスの形態をはっきりと採っているのである．

おわりに

これまで述べてきたように，文化的同質化へむかう諸力は確かに存在するものの，異種混交を特色にもつローカリゼーションはきわめて重要な展開を見せている．21世紀に入った現在，グローバリゼーションとハイブリッド化は，植民地主義と同質化の枠組みよりも生産的な概念を提供しつつある．クレオール化や雑種化といった主題は，アイデンティティ（ズ）・音楽・若者文化・ダンス・ファッション・エスニシティ・言語等の観点から，カルチュラル・スタディーズのなかでも永く探究されてきた．異種混交性のモチーフは，たとえば，二項対立の各項が他項の構成要素になりうるとするデリダのディコンストラクションでも議論されていたし，それ以降，ポストモダニズムやポストコロニアリズムの言説でも，繰り返し俎上に載せられてきた．世界経済におけるフォーディズムからポストフォーディズムへの大きな転換とポスト工業化社会への変貌とあいまって，社会階層の変容や消費社会の登場，そしてライフスタイルとアイデンティティ（ズ）の新たな形態が，グローバリゼーションの重要な構成要素となりつつあるのだ．

そうした変化のなかで，階級と政党の固定化した関係が弱体化し，社会階層間を横断する「新しい社会運動」が力をつけてきた．それらの運動は国民国家のプレゼンスと機能にさえ疑問を投げかけるが，それは，グローバルな資本主義の脱組織型的展開という文脈を念頭において理解すべき事柄であろう．そしてさらに，私たちがポストモダンと仮に呼ぶ，文化的・認識論的な「感情の構造」との遭遇と経験のなかで，グローバリゼーションの文化的な位相も理解されなければならないのである．

参考文献

Ang, I. (1996) *Living Room Wars*. London and New York: Routledge.

Appadurai, A. (1993) 'Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy' in P. Williams and L. Chrisman (eds) *Colonial Discourse and Post-Colonial Theory*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf.

Barker, C. (2000) *Cultural Studies: Theory and Practice*. London and Thousand Oaks, CA: Sage.

Clifford, J. (1992) 'Traveling Cultures' in L. Grossberg, C. Nelson and P. Treichler (eds) *Cultural Studies*. London and New York: Routledge.

Crook, S., Pakulski, J. and Waters, M. (1992) *Postmodernization*. London and Thousand Oaks, CA: Sage.

Deleuze, G. and Guattari, F. (1988) *A Thousand Plateaus*. Minneapolis: University of Minneapolis Press.

Featherstone, M. (1995) *Undoing Culture: Globalization, Postmodernism and Identity*. London and Newbury Park, CA: Sage.

Giddens, A. (1989) *Sociology*. Cambridge: Polity Press.

Giddens, A. (1990) *The Consequences of Modernity*. Cambridge: Polity Press.

Giddens, A. (1992) *The Transformation of Intimacy.* Cambridge: Polity Press.
Hall, S. (1992) 'The Question of Cultural Identity' in S. Hall, D. Held and T. McGrew (eds) *Modernity and Its Futures.* Cambridge: Polity Press.
Harvey, D. (1989) *The Condition of Postmodernity.* Oxford: Blackwell.
Melucci, A. (1981) 'Ten Hypotheses for the Analysis of New Movements' in D. Pinto (ed.) *Contemporary Italian Sociology.* Cambridge: Cambridge University Press.
Pieterse, J. (1995) 'Globalization as Hybridization' in M. Featherstone, S. Lash and R. Robertson (eds) *Global Modernities.* London and Newbury Park, CA: Sage.
Robertson, R. (1992) *Globalization.* London and Newbury Park, CA: Sage.
Robins, K. (1991) 'Tradition and Translation: National Culture in its Global Context' in J. Corner and S. Harvey (eds) *Enterprise and Heritage: Cross-currents of National Culture.* London: Routledge.
Schiller, H. (1969) *Mass Communications and the American Empire.* New York: Augustus M. Kelly.
Tomlinson, J. (1991) *Cultural Imperialism.* London: Pinter Press.
Waters, M. (1995) *Globalization.* London: Routledge.

〔なかの　ひろみ　横浜国立大学経営学部助教授〕